

保存と公開活用を両立する歴史的建造物の展示空間改修

／静嘉堂文庫美術館 明治生命館1階展示ギャラリー（静嘉堂@丸の内）

大内 靖志

はじめに

昭和期建築として初めて国の重要文化財指定を受けた歴史的建造物である「明治生命館」の1階ラウンジ部分を静嘉堂文庫美術館の展示ギャラリーへと用途変更し、改修を行った。改修設計に当たっては、歴史的意匠に最大限配慮しつつ新しい美術館機能との共存を図り、保存と公開活用を両立することが極めて重要な使命と理解し、その実現を図った（挿図1）。その具体的な取組みについて述べてゆきたい。

明治生命館の歴史と保存再生

まず本建造物の成立ちについて触れておきたい。意匠設計 岡田信一郎・捷五郎（兄弟）、構造設計 内藤多仲らの尽力により昭和九年（一九三四）に竣工した「明治生命館」は、日本近代の古典主義様式の最高傑作としてその発展に寄与した歴史的建造物である（挿図2）。長期にわたり明治生命本社ビルとして使い続けられ、戦後一九四五～五六年におけるGHQによる接収など、昭和の激動期を乗り越えた後、平成九年（一九九七）に昭和期の建造物として初めて、国の重要文化財（建築物）に指定された。

平成十七年（二〇〇五）には、明治安田生命保険相互会社の発足、本社ビル建設と連動した街区再開発に伴い大規模な整備事業が実施され、主要部分の当初形式・歴史的意匠を保ち重要文化財として保存を行うつつ、機能性・居住性・安全性の向上と利活用が図られ、歴史的・現代的価値を併せ持つ丸の

内地区のオフィスビルとして文化財建造物の動態保存が実現されている（挿図3）。この整備事業の際、北側1階の吹抜空間に面した2階の廻廊と、廻廊に面しGHQ接収時に対日理事会が開催された特別会議室は、創建時への復元など家具什器も含めた整備保存がなされ、戦後の記憶を呼び起こす貴重な空間として現在は一般公開されている（挿図4）。また創建時より事務室として利用されていた吹抜部は、「明治生命館」をより多くの人々に親しんでもらうため、常に一般に公開される明治生命館街区のラウンジとして整備され、歴史的建造物を体感できる特徴的な空間として、TV番組、コンサートやブランドの新作発表会等にも利用されてきた（挿図5）。

展示空間改修による新たな価値創造

整備事業より十七年を経て、上記ラウンジをさらに有効に活用するため、三菱第二代社長の岩崎彌之助氏と第四代社長の岩崎小彌太氏が設立した静嘉堂を祖とし、曜変天目茶碗に代表される数々の国宝や重要文化財の美術品を保有する静嘉堂文庫美術館の展示ギャラリーが誘致されることとなった。美術館の展示空間には後述するように厳しい性能条件が求められるため、計画の実現には、多くの課題が予想されたものの、上述の通り保存再生された2階の特別会議室と廻廊に面した象徴的な吹抜部に、美術館の展示空間を新たに重ね合わせることで、保存と公開活用を両立して新旧の相乗効果による新たな価値が創造されることが期待された（挿図6）。ゆえに私達は高いモチベーションを持って、歴史的な建築文化を実際に体験し得る意義深い場の創出を目指した。



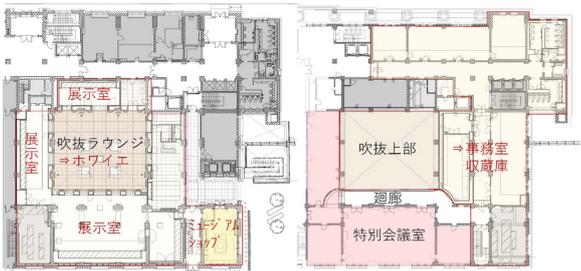
挿図1 展示空間改修 吹抜部(ホワイエ)2022年



挿図3 複合オフィスビルとして整備 2005年

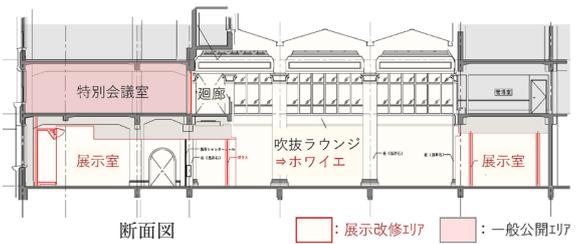


挿図2 皇居外苑に面する明治生命館 1934年創建



北側1階 平面図

北側2階 平面図



断面図

□: 展示改修エリア □: 一般公開エリア

挿図6 改修計画図



挿図5 1階 吹抜ラウンジ



挿図4 2階 特別会議室



挿図7 ホワイエから展示室内を見る



展示室内からホワイエを見る



挿図9 展示室3 柱型やアーチ開口が遺る



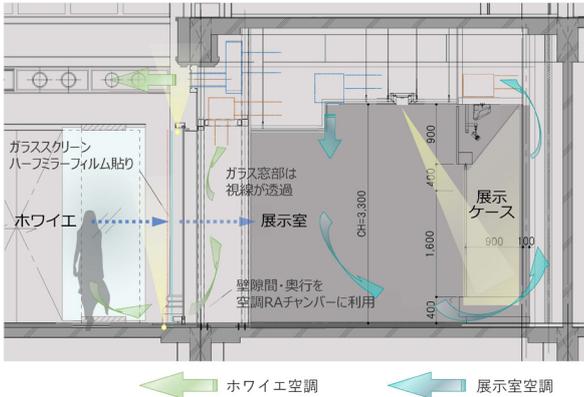
挿図8 展示室2 E V開口の遺る壁面

・吹抜部（ホワイエ）と展示室の関係

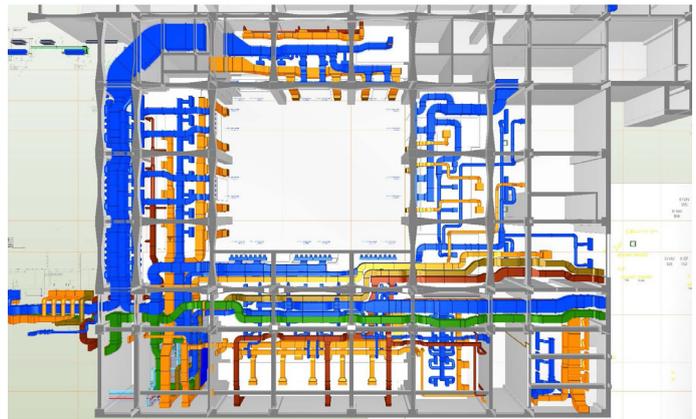
まず始めに、通常は安定した展示環境を保持するために閉鎖的にならざるを得ない展示空間を新たに吹抜部に面して挿入することで、この空間が元来持っていた広がりのある壮麗な空間性を損なうようなことがないよう、意匠上の工夫が必要と考えた。そのため、吹抜部に表出する展示室の境界壁は、自立するハーフミラーガラスと遮光フィルム貼りのガラスを、レイヤー状に交互に配置し、さらにこれらのガラス壁の周囲には間接照明を組込むことで、視覚的効果による新旧の奥行き感を演出した。またこの手法により、既存の力強い古典的な架構形式の中に、反射と透過が重なり合う展示室の境界壁が現れ、まさに新旧が併存して共鳴する様を体感できる空間を創出できた。さらに境界壁の遮光フィルム貼りガラスを通じて、ほのかに展示室内の様子を中央の吹抜部（ホワイエ）側から見通せる、逆に展示室内から吹抜部が見えるという関係をデザインし、展示空間を回遊しながらも、明治生命館という建築と共存していることが意識されるような試みを行った（挿図7）。展示室内においても、既存建築の特徴的な要素をできる限り遺し、新たに設置する部分との共存を図った。展示室2では創建時の趣深い押釦や階数表示を含むE V開口を、展示室3では石貼りの柱型やアーチ状の開口部を遺した状態とし、既存の要素に囲まれる鑑賞動線の中に、新しい展示ケースを配置して、新設の展示室とした（挿図8、9）。こうした所作により、美術鑑賞を行いつつ、現代に遺る歴史的建造物（レガシー）を肌で感じとれるよう計画した。

展示空間としての性能確保

重要文化財であり現在もオフィスビルとして利用されている本建造物を、国宝や重要文化財級の美術・工芸品の展示・収蔵を可能とする空間へと、しかも居ながらでの改修を行うに当たっては、性能確保の面で、施工性を含め様々な課題があった。要求性能の設定に際しては、静嘉堂文庫美術館の学芸員の皆さまと継続的に打合せを行い、また要所では関係行政との協議を実施



挿図11 ホワイエ/展示室の構成と空調方式



挿図10 空調供給(循環)ルートの3次元モデル検討
展示室、及び、吹抜部(ホワイエ)へのルートも再構成している

し、様々な知見をまとめながら一つ一つ課題解決に取り組んだ。新築と異なり、限られたスペースの中でできることを追求していく改修計画において、様々な視点での3次元モデルを活用した環境シミュレーションや具体的な検証を、愚直に行いながら設計を進めた。

・温湿度・空気質管理

最重要課題である温湿度・空気質管理に関する空調設備計画は、基本となるプランニングに大きく影響するため、計画の初期段階に、展示・収蔵室内の基準となる温湿度条件を設定し、この基準に適合すべく、一室一空調機対応となるよう各所にスペースを確保して専用空調機を新設し、各室への供給(循環)を行う計画とした。空調機にはケミカルフィルターを設置して室内の空気質に配慮し、美術・工芸品への劣化影響を最小化した。各室への供給(循環)ルートは既存躯体へ干渉することなく室内の天井高さを確保できるよう、また室内で空調空気が澱み無く循環するよう、3次元モデルを用いた検証を行い(挿図10)、具現化を図った。さらに展示室新設に伴って、吹抜部空調の給排気ルートの再構成が必要であった。吹抜空間においては歴史的意匠を最大限尊重する必要があると判断していたため、建築と設備の慎重な調整により、新たな展示室天井や吹抜部に表出する境界壁の中に、空調ダクトや給排気口を隠蔽する計画の実現を図った(挿図11)。

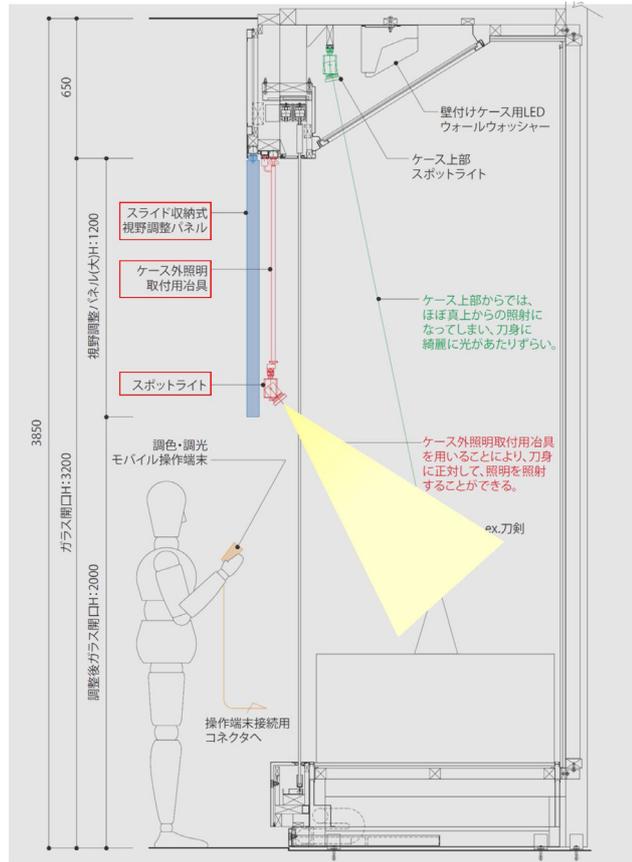
・防火対策

展示空間に求められる防火性能を確保するため、吹抜部と展示室の境界壁やガラス窓は耐火性能を有する材で構成した。また各展示室の出入口には境界壁の奥行きを利用して常開防火戸を組込み、展示室まわりに火災時の防護区画を形成した。この区画形成により展示室内にガス消火設備を導入し消火時の美術品保護を図っている。かつ関係行政との協議や指導に基づき、美術館エリアの周囲で火災が発生した場合の延焼性の検討も行った。既存建築の調査も並行しつつ、一部に防火区画を設定した。

・浸水対策

今回は1階を展示空間とする計画のため、周辺が浸水した場合も想定したシミュレーションを行いその対策を立案した。これに基づき、建物外部に面

所在地：東京都千代田区丸の内2-1-1
 主な用途：美術館
 敷地面積：11,347㎡
 建築面積：3,856㎡
 延床面積：1,800㎡(改修面積)
 設計：竹中工務店
 施工：竹中工務店・丹青社



挿図12 壁面展示ケース スライド収納式視野調整パネル

した開口部における止水版の各所対応や展示ケースの高さ設定の確認を行い、浸水リスクに関しても万全を期す計画とした。
 ・展示環境の設計

美術品鑑賞において主題となる展示環境の設計については、学芸員の皆さまや展示設計のコンサルタントとして丹青社に参画頂き、定期的な打合せで詳細の検討を重ね、多くの知見を基に、理想的な展示環境の実現に取り組んだ。展示室内の照明計画は、省エネルギーに配慮したLED光源とし、高演色性かつ色温度可変、調光可能な器具を採用して、展示ケース配置に合わせた設計を行った。また造り付けの壁面展示ケースに関しては、学芸員の方の強いご意見を取り入れ、スライド収納式視野調整パネルを開発し、導入することにより、展示作品の形状、大きさによって最適なガラス開口高さを簡便に調整できるように計画した。またこのパネルの背後にケース外照明取付用治具を設置して、スポットライトを設置できるよう工夫を行い、展示作品への照射環境自由度の向上を図った(挿図12)。

まとめ

活用しながら歴史空間を発信する明治生命館・静嘉堂文庫美術館

多くの方々のご尽力に支えられ、二〇二二年十月に静嘉堂文庫美術館(静嘉堂@丸の内)が開館し、現在多くの人々がこの空間を訪れ美術品を鑑賞しつつ「明治生命館」を実体験している。また美術館の訪問者が、歴史的価値の高いこの館の一般公開部分(美術館2階に面する特別会議室や、隣接する店頭営業室等)にも足を運ぶことで新しい体験価値が生み出されたと思う。当初より近代的なビジネス街にミュージアム創設を願っていたと言われる、静嘉堂創設者岩崎彌之助氏の意思を継ぎ、丸の内という日本を代表するオフィス街の街並みに、歴史的建造物を活用する事例として、明治生命館・静嘉堂文庫美術館が文化を発信し続けることを期待する。

(竹中工務店 設計部)